

座 談 会

“創造都市さっぽろ”の実現に向けて

～札幌ビエンナーレが目指すもの～

札幌市では、これまで芸術の森、札幌市立大学デザイン学部、コンサートホール・キタラ、パシフィック・ミュージック・フェスティバル、札幌市民芸術祭、07年札幌文化芸術振興条例、10年には文化芸術基本計画の策定など、幅広い芸術文化活動の基盤となるハード・ソフト両面からの施策を展開してきました。

「創造都市さっぽろ」は、06年の札幌市長の「創造都市宣言」に基づくもので、09年に同推進会議から出された提言書では、「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、絶えず新しいコト、モノ、情報を発信していく街」を目指すとうたっています。

こうした流れの中から、札幌市では芸術文化活動を市民レベルで継続して発信・発展させていこうとする運動が起こっています。2014年に開催を予定している札幌ビエンナーレです。この運動の特徴は、「札幌を中心にしつつ北海道全体を視野に、産業にもつながる“都市体験型ビエンナーレ”で、ビエンナーレという言葉そのままに「2年に1度の芸術祭開催」を軸に、誰もが主体として参加する形で、それに至るまでの過程で行なわれる芸術文化活動の蓄積を図る持続的な活動であることです。

今回は、こうした動きの中で、改めて北海道でもこれまで盛んに行なわれてきた芸術文化活動の蓄積を検証し、その上に立って、今後の芸術文化活動の北海道全体への展開や運動のあり方、地域づくりへの展開方法などについてお話しいただきました。

出席者

(50音順)

可児敏章 氏 札幌市市長政策室政策企画部長

竹津宜男 氏 PMFを応援する会会長

(札幌市文化芸術基本計画策定委員長、札幌ビエンナーレ実行委員会副委員長)

武邑光裕 氏 札幌市立大学デザイン学部教授

(創造都市さっぽろ推進会議議長)

端 聡 氏 CAI/街クスト代表取締役

(創造都市さっぽろ推進会議委員)

コーディネーター

石森秀三 氏 北海道大学観光学高等研究センター長・教授



石森 私が札幌に来ました2006年に上田文雄市長の「創造都市さっぽろ」の宣言がなされています。

過去のいろいろな積み重ねがあつての「創造都市さっぽろ」、そして、今はより具体的な展開としてのビエンナーレがあるということですが、「創造都市さっぽろ」に至る札幌の芸術文化の流れについて、まず竹津さんに口火を切っていただければと思います。

ポートランド市との姉妹都市提携の中から生まれた札幌交響楽団



竹津 私は、1960年10月に演奏旅行で初めて札幌に来ました。札幌へ来てみると、まちがすっかりしているのと、2年前にオープンしたばかりの札幌市民会館が素晴らしかった。

それで、観客との交流会で「このまちにオーケストラがあつたら、飛んで来るのに」と言いましたら、翌年の正月に「札幌にオーケストラを作ります。来てくれますか」という電話がかかってきました。それが札幌交響楽団でした（笑）。

1959年11月、札幌市の原田市長が米国オレゴン州ポートランド市に姉妹都市の調印に行き、全米一のジュニアオーケストラを聴かされ、「今度は札幌へ行きますから、札幌のオーケストラを聴かせてください」と言われて帰ってきたのが、もともとの話です。

そこから後が正念場です。ありがたかったのは、当時はまだ「だんな衆」がいました。オーナー社長です。「応援するよ」と皆さんがお金を下さる。日本中から「ジェット機のように飛ぶ」と言われるほど飛び上がって大きくなりました。私も、「札幌は札幌だけのオーケストラではない、北海道のオーケストラだ」と当時の道内212市町村を「皆さんのオーケストラとして受け入れてほしい」とお願いして歩きました。

札幌市も補助金を一生懸命増やしてくださった。札幌市が増やすと北海道も増えるわけです。文化庁も、地元がそれだけ力を入れてやっているのなら座視するわけにいかないとオペラを作っていた東京の二期会と並ぶ補助金を出してくれました。20周年からは文化庁

の移動芸術祭で全国を単独で回るといふ形になり、いっぺんに全国に名をはせました。

札幌市の施策としての芸術文化

可児 私が札幌市に入った78年には既に政令指定都市（1972年）になっていました。今は10区ですが、当時はまだ7区でした。本当に市の規模が右肩上がりの時代でした。

石森 72年の札幌冬季オリンピックが大きな契機でしたか。

可児 国のお金もたくさん入りますし、「目指せ！オリンピック」ということでした。札幌が一大都市に転換していくきっかけはオリンピックだったと言っていると思います。

石森 「創造都市」に至る流れを振り返るとどうなりますか。

可児 まちづくりや都市化は、右肩上がりのときは公共事業中心で、芸術の森のようないろいろな施設を造ってきましたが、トータルで見た場合、芸術文化というソフトにはなかなか日が当たらなかったのではないかという気がします。それが、日本が成熟してきて、本当の豊かさとは何かを求めて、芸術文化が表に出てくるといふ大きな流れが札幌にもあったのではないかという感じがします。

ようやく地域のアートプロジェクトが立ち上がる



端 戦後は道展を中心とした公募展が中心でした。国際芸術祭に向けた動きは70年後半から始まっています。今は札幌文化団体協議会の会長になっている美術家の阿部典英さんなどが中心になって、80年代初頭には「札幌トリエンナーレ」という3年に1度の国際美術展がありました。

作家本人が実行委員会に入り、自らスポンサーを集めていました。海外とのやり取りも当時はファクスと国際電話という状況で、作家が全部自分たちでやっていたものですから、作品制作に集中できないなどの理由で、残念ながら第3回で終わって

しました。

90年代に入ると、今度は文化庁の文化助成金が少しずつ充実してきて、運送が割と楽な版画を中心に1991年から2000年まで5回ほど「さっぽろ国際現代版画ビエンナーレ」が、また「プリント・アドベンチャー※¹」というような国際展が開かれました。いずれもアーティスト主導でやっています。

2000年代には、文化外交として国際芸術祭が考えられないかということで、道立近代美術館で若手アーティストを中心にした「FIX・MIX・MAX！—現代アートの最前線—」という国際展を、幾つかの国も入れて2006年、08年にビエンナーレ形式で行いました。この流れが、05年から札幌市が行っている「さっぽろアートステージ」という、市民にふれてもらうイベント・プロジェクトの美術部門につながっていきました。

先ほど「芸術文化面では、ハードはあったが、ソフト面にはなかなか日が当たらなかった」と可児さんが言われましたが、本当にここ10年ぐらいです。アーティストを呼んできて商店街全体で何か大きな作品を作りましょう、商店街のショールームを芸術作品として連続させていきましょうという、地域のまちおこし、活性化を目的とするアートプロジェクトが行われ、ようやくソフト面に入ってきている。最近は「創造都市」を上位概念にしながら、国際性を世界に発信するという流れに移ってきたところだと思います。

札幌は大きなポテンシャルを持っている都市

武邑 私が札幌に来たのは2005年です。市立大学の開学準備室ということで市役所に、06年からは大学です。

石森 札幌のイメージは、いかがでしたか。

武邑 芸術の森が原点です。全国的に見ても非常に恵まれた文化施設だと思います。そうした過去のよい時代の文化施設を新しい時代にどう活性化できるか、そして大学を作るということ、それと札幌の魅力に引か



札幌アートステージ

れて来ました。

私のライフワークは、日本の地域を文化やアートと連携して再生するために、力になりたいということです。「創造都市」は一つのビジョンで、それを行政や市民がどう具体的なプロジェクトに転換していくかが重要です。

韓国は10年以上前に、国策として「文化産業」を支援し、それが現在の世界における韓国の製品産業、コンテンツ産業の隆盛につながるわけですが、日本の経済産業省も今年になってようやく「文化産業立国」を宣言しました。

20世紀的な価値観が大きく変容してきています。右肩上がりの時代は、工業経済が文化を担保し、経済の余剰が文化を育成してきましたが、21世紀になると世界的に見ても「文化が経済を牽引する時代」になってきました。韓国、中国も今、文化産業を、創造産業とも言いますが、非常に力を入れています。2000年以降、石森先生のご努力下、それまで経済的な指標にもなかった観光産業を、日本は「観光立国」として振興することになりました。文化芸術は、観光と大きな関連性があります。札幌は全国的にも、観光や文化芸術においても大きなポテンシャルを持っている都市です。この領域を特化して、日本のフロンティアになっていく可能性は大きいという感触を持っています。

“芸術の森”から“創造都市さっぽろ”へ

石森 80年代の右肩上がりの時代は、まさに経済が文化を引っ張ってきたことですが、その時代を札幌で過ごされた竹津さんはどうでしたか。



竹津 1972年の札幌冬季オリンピックを境に、札幌のまちが変わりました。私が好きで来た札幌のまちは、オリンピック前のものです。映画「乱」の音入れを札幌がやったのですが、黒澤明監督は「札幌はロシアのまちだった」と言われました。「白痴」（1951年公開）という映画を撮りに来られたころの印象です。

※ 1 1998年に名称を「アジア・プリント・アドベンチャー」と改名、2008年までシリーズ化している。



札幌コンサートホールKitara

それが、オリンピックを境に、街がビルだらけになりました。札幌に生まれ育った方は「札幌が都市化する」と喜びましたが、私が「それは違う。こういう方向でいくのなら、札幌にいたくない」と言ったので、対立しました。そうしたら、青年会議所が「言いたいことを言いなさい」とシンポジウムをやってくれました。「まちおこし」という言葉がありますが、私は「まちづくり」だと考えています。文化はまちづくりに役に立つのです。札幌のまちは、ただ箱だけを並べてもしょうがない、もっと美しいまちを作らなければ駄目だ。大通公園には銀行と生命保険会社が並んで、3時になったらシャッターが下りつまらない通りになる。もっと楽しい大通公園にしようということです。

そうしたら、当時の板垣武四市長（1971～91年）が「札幌の練習場も欲しいのではないですか」とおっしゃった。「もちろん欲しいです。まちも変えたい」とお話ししたら、青年会議所の提案でという格好で受けてくださった。それでできたのが芸術の森です。

また、大通公園の両わきに建っているビルを建て替えるときには、歩道の境目から3m、3階ぐらいの低層階のミニガーデンを作るか、レストランみたいなものを作れ、という条例を作ってもらいました。

また、「全国的に認められた札幌があるのだから、ちゃんとしたホールを中心に、もう一ぺんまちを作り直してみましよう」と言ったのもちゃんと聞いてくださり、札幌コンサートホールKitara（1997年に完成）につながっていきます。非常にありがたかったです。



可児 板垣市政を継続する形で桂信雄市政があり、桂市政の後半には公共施設はもう十分ではないかとなってきました。その後が上田市政です。上田市長は市民自治や芸術文化を大事にするということを公約に

掲げ、2003年に登場して、今は3期目です。市役所内では、上田市長が芸術文化に対する造詣そうけいが一番深く、職員がついていくのに一生懸命という感じです。

石森 そういうところで、武邑さんは市役所に1年おられて、大学を作られたわけですが、最初の手応えはいかがでしたか。

武邑 大学が設置される「芸術の森」の歴史を学ぶことが最初でした。芸術の森と大学が札幌の芸術文化にどう連携できるかということでした。また、大学が設置された直後ですが、札幌駅前地下歩行空間の構想検討委員会にも関わらせていただきました。

札幌では、芸術の森美術館や道立近代美術館など、20世紀型の文化芸術インフラは整っていますが、現代アートに関連した施設は少ないです。これからのアートの新しい表現媒体は、美術館やギャラリーに限定されません。地下空間のデジタルサイネージ※2などを、現代アート、特にメディア芸術の表現空間にできるのではないかとことを考えました。通常は交通の手段である地下空間にコミュニケーションやミュージアムの機能を付加したらどうなるか。言ってみれば、既存の社会資本を創造資本に転換するということです。既存のインフラをどう再活性するか、竹津さんがおっしゃったまちづくりという観点から、トランスポーションとコミュニケーションを合体させた空間、市民が自由にコンテンツを投稿できるような仕組みを作ろうということです。それで生まれたのが、札幌駅前地下歩行空間北2条広場のCGMサイネージ※3という空間です。

これを「創造都市」の可視空間、象徴的な空間とし、そして市民が長期的に利活用することによって、創造

※2 デジタルサイネージ (digital signage)
映像表示装置とデジタル技術を用いた広告媒体。ディスプレイやプロジェクターなどで広告や案内をするもの。電子看板。

※3 CGMサイネージ
“創造都市さっぽろ”発信空間。創造都市の主役である市民・ユーザーが自ら情報を発信するCGM (Consumer Generated Media : 消費者生成メディア)型コンテンツの展開を中心とする東西に10面のディスプレイを備えたメディア空間。



CGMサイネージ地下歩行空間



500m美術館

都市をアピールしていくということです。

可児 あそこは物事の成り立ちにとって象徴的です。地下歩行空間が構想として具体化するのには、92年ごろです。最初は公共事業としての地下通路という概念が強かった。私は財政当局において予算査定をやる立場でした。地下鉄は当時から赤字でなかなか経営が立ちゆかないという話がある中で、一番のドル箱区間に歩行空間を作って人を歩かせるとはどういうことなのか。また、公共事業としては道路として造らなければなりませんから、地下街にはできないわけです。財政の担当者としていかなるものかと思った記憶があります。

そこで、地下歩行空間をいったん白紙に戻して再議論しようということを経営に掲げて当選してきたのが上田市長でした。

その後、市民を入れて、いろいろな形で議論をして、地下歩行空間の性格を単なる地下通路ということではなく、外側を広場化して市民が活用できる機能を持たせようという大きな転換点があり、その延長線上にCGMサイネージなど創造都市としての象徴的な空間があるわけです。

札幌全体を一つの美術館に、都市を体験型するビエンナーレ

石森 端さんは、以前からアートのプロデュースを手がけてこられました。創造都市さっぽろの動きが出てからの変化をどうとらえていますか。

端 変化は相当強いんです。札幌が右肩上がり成長していったときの創造的なインフラとしては、芸術の森やモエレ沼公園などがありますが、地元若手アーティストはその恩恵をあまり受けていませんでした。もちろん最近は変化しています。武邑さんが「20世紀

型」という言い方をしましたが、全国的にも著名な方々の整備が先にされ、本来は世界に出ようとしている30代ぐらいの感性を拾い上げなければならないのですが、そこまで手が回らないという状況がありました。札幌のかなりよい若い才能が、東京や海外に流出してしまいました。

流出させないよう札幌から発信しようという運動があるときに、ちょうど上田市政が始まり、若手アーティストを応援するアートステージがあり、また、札幌駅前地下歩行空間も「創造都市」の概念によって、CGMというデジタルサイネージからメディアアートを世界に発信しようということになっています。

また、今年から通年化する「500メートル美術館」も地下です。年間5～6mの雪が降るといって札幌の地域特性の中で、インフラとして地下のコンコース整備が行われ、それを創造的社会資本として逆手に取り、地域特性を地下から世界に発信していこうというのは、世界にもあまり類がないことです。

ビエンナーレと創造都市さっぽろ

端 「創造都市」を上位概念にした「札幌ビエンナーレ」では、札幌の地域特性を生かした地下まちアートという地下からの発信、美術館といった箱ではなく、札幌のまち全体が一つの美術館になる、都市を体験型にするという方向性がやっとならなくなってきている感じがしています。

石森 プレ・イベントも行われていますが、ビエンナーレは2014年が目途になるのですか。

可児 札幌市では今、4年間の計画を作っていて、14年度にできるように計画しています。

石森 ビエンナーレは創造都市さっぽろではどういう位置づけにあるのですか。

武邑 創造都市さっぽろ推進会議で提案したプロジェクトの一つです。「創造都市」は、一つの都市モデルをみんなで目標にしようというのではなく、都市ごとにそれぞれが都市を創造的にとらえて、どうまちづくりを展開していくかということです。その中で札幌の特性やポテンシャルを考えた結果が、ビエンナーレでした。



ビエンナーレは2年に1度ということで、国際芸術展は世界中で行われています。1895年から開催されているヴェネツィア・ビエンナーレでは、国を代表するアーティストが出品して、コンペティションをやる、美術アートの国際的なオリンピックです。そうした大きいものから、より地域に密着、地域独自の個性を前面に出したローカルな芸術祭も盛んになりました。2010年の瀬戸内国際芸術祭は来場者が100万人、経済波及効果も111億円と言われています。まち単位の芸術祭で、まちづくりと連動するという動きもこの10年ぐらいの間に日本でも活発になってきました。

こうした動きを踏まえ、特徴ある札幌のプレゼンス（存在・存在感）を明確に世界に表現できるような国際芸術祭をとというのが、札幌ビエンナーレです。

そこで昨年、まず市民レベルから始めようと大平具彦（北海道大学名誉教授）先生が中心になって、札幌ビエンナーレ・プレ企画実行委員会が立ち上がり、今年4月に道立近代美術館で第1回の展覧会「札幌ビエンナーレ、プレ企画2011」が実施されました。

市の検討もこれから始まると思いますが、市民不在で形式的なトレンドを後追いするような芸術祭だけにはなってほしくないと思います。

石森 副委員長としては、いかがですか。

竹津 支えているのは市民です。行政としても「市民がこれだけやっている、市民の声はちゃんと生かされ

ている」というのが見えるような格好でやっていただきたいと思います。

私は札幌の事務局長をやっていましたが、一市民としての発言が実現できています。北海道の学校の先生方の新聞連載企画「夢をかなえた男」の第1回に私は載せていただいています。札幌が日本を代表するオーケストラになれた、芸術の森ができた、大通公園もきれいになった、Kitaraができた、まちもきれいになってきたと、言っていたことが実現したという記事になっています。これから先は、音楽だけでなく、他のアートも全部入れて、市民が一生懸命支えた中で、「行政はこんなことをやっている」ということがみられたら格好いいと思います。

行政はどう思い切った場を提供していくかが重要

石森 札幌市としてはいかがですか。

可児 1万人市民アンケート調査などで市民ニーズを把握し、施策に結びつけていっていますが、「今後の重要な施策は何か」というアンケートを取ると、子育て支援、高齢化対策、医療などへの要望が多く、芸術文化や市民自治は低い。しかし、市民がちゃんとニーズを表現できているかどうかは別です。つまり、行政が時代認識や今後の社会の在り方についてどう深く洞察するかが、試されています。そういった視点も含めて、市民としっかり議論していくことが、ポピュリズム^{※4}ではない、本当の市民自治につながっていくのではないかと感じます。

「創造都市」という概念は、市民にとっては難しいものです。デザインやアートの振興という狭い認識では理解されやすいのですが、市民社会や文化、経済と絡んで、社会的な包摂という概念まで含んだ、社会の根底に流れるような広い概念だと理解してもらうことは難しい。そういった意味では、「創造都市」はその活動を実際に市民に見てもらい体感してもらうことで、人々の生活に浸透していくようなものではないかと思っています。

端さんのような時代の先駆者的な考え方に対し、行

※4 ポピュリズム (populism)
民衆の利益が政治に反映されるべきという政治的立場を指す。ただし、上記の表現では、「大衆迎合な政治手法」という意味合いで使用されている。

政は、思い切った場の提供をしていくということが必要で、今回のビエンナーレは、そういうものではないかと思っています。

芸術文化は“先行価値”

武邑 芸術文化は先行投資すべき先行価値の創造です。例えば、20世紀後半期の日本の製造技術には、国が海外の先行事例をキャッチアップし、情報提供していたように、国を挙げ、地域を挙げて先行投資しました。今それでは、芸術文化にどれだけの先行投資がなされているかという、20世紀と21世紀の価値観ののりしろの間で揺れています。行政は山積する直近の現実課題に直面し、市民もそちらに目が向く。先行投資や先行価値に対する理解が非常に限定される時代だと思えます。

だからこそ、「創造都市」というビジョンを含め、札幌市が芸術文化に理解ある施策を展開していることが重要です。ユネスコの「創造都市ネットワーク」に札幌市は「メディアアート」で加盟をめざしていますが、メディアアートという分野は今、日本では文化庁が、その振興を国策として展開しています。グーグルマップの原型は、今から40年ぐらい前にMIT^{*5}のメディアラボで作られたものです。芸術文化の先行価値は、一般の人々のインフラになるには時間がかかることも多く、私たちの身の回りの情報メディア技術が、アートの分野からも生まれていることを、もっと私たちは市民に理解を促していくことが必要です。

ビエンナーレも1、2回で終わってしまったら何にもなりません。持続可能なビエンナーレの形式とはどんなものか、官民で予算をどう支えていくか、単に「お祭り」を開催するのではなく、収支に対しても新しい発想が必要で、そこにこそ「創造都市」のビジョンが大きな意味を持つてくると思えます。

ビエンナーレも市民運動から始まることが重要

端 ビエンナーレは継続することで、創造的社會資本が構築されると同時に、市民、道民の創造力の文化的インフラ整備という状況ができ上がり、新しい創造が

なされていく。行政主導ではなく、市民運動から始まるということが重要です。

2006年に道立近代美術館で「FIX・MIX・MAX！—現代アートの最前線—」という国際美術展をやりました。報奨金や助成金をあえて申請せず、アーティストには制作費もちゃんと支払い、実行委員とそれを応援する若いボランティアが300名ぐらい集まって、商店街などから少しずつお金を集め行きました。8日間という短い期間でしたが、3,200名ほどの来場者があり、道立近代美術館も「こんな短い期間で、しかも現代アートの展覧会でここまで来たのは初めて」とびっくりしていました。

こうした市民運動の延長線上で、昨年6月、札幌ビエンナーレ・プレ企画実行委員会を立ち上げ、今年4月に道立近代美術館でプロローグとなる、プレ企画2011「美術館が消える9日間」を開催しました。今まで



の国際芸術祭は現代アートを中核に置いていますが、札幌は歴史のない分、差別化を考えなくてはならない。それで、日常に素晴らしい創造の表現があるというところにフォーカスを当て、「アートから出て、アートに出よ」「アートを全方位へとひらく」というコンセプトで行いました。

この市民運動は他の地域でも行われています。一つは、日本の経済成長時代の歴史、50年間の光と影にアートがどう参画できるか。もう一つは、ネイティブアートに焦点を当てるとのことです。9月の「夕張炭鉱跡地清水沢アートプロジェクト」は、高度成長時代のエネルギーにおける屋台骨を作った北海道の炭鉱、中でも夕張炭鉱は質がよく重宝され、50年前にはまさに輝かしい地域の盛り上がりがあり、その後は経済破綻という陰の部分を知ることになります。そこにアートが参画し、まちをどうつくっていくのか、シミュレーションしようということでした。

同じ9月に白老町で開かれる「^{とびう}飛生芸術祭2011」で

^{*5} MIT (Massachusetts Institute of Technology) マサチューセッツ工科大学。米国マサチューセッツ州ケンブリッジ市にある。同大学のメディアラボは情報技術関連の先端を走る研究所として有名。

は、日本で唯一と言えるかもしれないネイティブアート、アイヌ文化の音楽を、アメリカではすでに前衛音楽としても評価されていますが、しっかりと地元から発表していこうとしています。

そしてもう一つ、芸術の森美術館では、10月末から「アートから出て、アートに出よ」という、日常の中に視点を合わせて、サブカルチャーやオタクカルチャー、アニメ、漫画などを一堂に展示するものを行います。メディアアートに限っては「初音ミク」現象があるように、まさに札幌は「サブカルチャーの聖地」になりつつありますが、そういうものに焦点を当てて発信しようということです。

今年のプレ企画は、日本の戦後の歴史、日本のネイティブ文化、歴史がない札幌だからこそできる新しいメディアアート、サブカルチャーに焦点を当てて、行うという方向づけをしています。

新しい価値観を生み出したメディアアート

石森 ユネスコの「創造都市ネットワーク」も、そうしたメディアアートですか。

武邑 11月22日には「メディアアート国際会議」が札幌市主催で開催されます。MITメディアラボの日本人で初の所長、伊藤穰一さんが基調講演で来札します。また、ユネスコの「デザイン創造都市」認定を受けているベルリンの伝統あるメディアアートのフェスティバル「トランスメディアール」の創設芸術監督であったアンドレアス・ボッカー氏が来ます。

普通の市民は、今札幌で起こっている「初音ミク」現象をまだまだ理解していないと思います。先日行われた初音ミクライブでは、札幌教育文化会館が2日間、満員でした。CGで動くバーチャルなアイドルですが、一般のユーザーが作った曲を基にしてコンサートが実現します。20世紀の価値観では理解できない、ひとつの革命が起こっています。元来「初音ミク」は、音声合成ソフトウェアで、その販売元が札幌のクリプトン・フューチャー・メディア(株)です。世界のユーザーが自分たちのコンピューターで「初音ミク」の曲を作る日

も近いでしょう。こうしたユーザー生成コンテンツの新しい方向性が札幌から発信されています。これもメディアアートの領域です。

従来コンテンツ産業といえばマスメディアに依存する規模の経済で、当然コンテンツの発信はプロが担っていましたが、今はアマチュアの創造性がソーシャルメディアを介して世界に評価される時代です。これは、従来の生産者と消費者が分離した経済とは異なり、「生産消費者」による創造経済の台頭を示しています。創造経済とは、人々や組織の多様な表現活動から生じる経済であり、従来の消費者が自らの表現や生産活動を行う過程で展開される経済活動です。従来の映画会社や音楽会社だけが独占していたコンテンツ産業は、今や世界中の人々による創造活動の大規模な台頭によって大きく変化しています。

ライフスタイルや価値観、経済システムが劇的に変化していく中で、メディアアートというジャンルも幅広い産業分野と連携します。今後の「創造都市」施策、産業振興においても、文化芸術の振興は、科学技術のそれと同等な先行投資だと認識すれば、札幌ビエンナーレの役割は、グローバルとローカルを柔軟の結節する「メディアとしての都市」機能をフルに活性する観点が必須だと考えます。

世界の三大国際教育音楽祭になった“PMF”



石森 革命的变化が札幌から起ころうとしているということですが、90年に始まったパシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) は、今や世界の三大国際教育音楽祭です。立ち上がった経緯をお話してください。

竹津 私は札幌の事務局長を1990年12月末にリタイアしましたが、その前年に、札幌にふさわしいホールを造るために市民運動を起こそうと北海道音楽団体協議会を作りました。それと同時に、札幌で国際音楽祭をやりたいということで、今、私が副理事長を務めている北海道国際音楽交流協会 (HIMES) もできました。

89年から具体的に何かやろうというところに、PMFが飛び込んできました。北京でやる予定が、天安門事件があって、平和主義者のバーンスタインはとも耐えられない。やめるか、代わりの土地を探すかというときに、野村證券がスポンサーについていたものですから、日本のどこかでできないかと探したのです。札幌には芸術の森があった。札幌がすでにクラシックファンを育てていた。ホールも厚生年金会館や札幌市民会館、教育文化会館がありました。米国マサチューセッツ州のタングルウッド音楽祭は、ボストン交響楽団がやっています。そういうことがあって、「札幌ではできないか」と私のところに話がきたのです。札幌の事務局にはそれに堪える体力はないし、教育音楽祭だから札幌市がやってしかるべきではないかと話しをしたら受けてくれました。

それから後の札幌市は、素晴らしかったです。89年9月に正式に話が来て、90年6月に1回目をやることに決まった。それで、バーンスタインのマネジャーが芸術の森を見に来ました。芸術の森には当時、アマチュアのジャズバンドができるぐらいの小さな野外ステージしかなかったのです。「札幌には厚生年金会館や市民会館があるし、何とかなる」と言ったら、「メインステージは野外ステージだ。これではオーケストラが載らない」と言うのです。翌日、市の文化部長から「何とかしてほしい」と言われ、定規と鉛筆を借りて目の前で図面を描きました。それが今の野外ステージです。90年6月20日にバーンスタイン一行が千歳空港に着いて、若い指揮者が翌日、芸術の森を見に来たら、野外の客席がまだ赤土でした。1週間後の26日が開会式です。来てみたらちゃんと芝生が植わっている。それで、



芸術の森PMF野外ステージ演奏会

彼のあいさつが傑作でした。「かねがね“日本人は神風を吹かす”と聞いていたが本当だ。1週間前に見た赤土が芝生になっている」(笑)。札幌市はすごい能力があると思いました。

そういう札幌市だから、今は経済的に大変ですが、21世紀型の創造都市づくりができると思います。

札幌ビエンナーレの開催に向けて

石森 PMFはバーンスタインがいた。ところが「札幌ビエンナーレ」には、バーンスタインがいない。外国の有名アーティストにかかわりなく、札幌から革命的な取り組みが生まれてきているということですね。

武邑 「横浜トリエンナーレ」は、行政主導で安定した基盤にはなりませんが、逆に先鋭性が薄まり、総花的な現代美術の名品展になっているように思います。札幌は北海道の文化的首都でもあります。総花的とい



うより、特徴ある方向が必要です。その軸は、地域がいかに自らその土台を築いて、その基盤の上に国際展を実現するかです。国際展に参加するブランドを持ったアーティストたちが、地域の新興アーティストたちの刺激になり、逆に札幌が国際的な芸術家に刺激をもたらすというローカルなアイデンティティーが極めて重要になると思います。

石森 そういう意味でも、札幌ビエンナーレは20世紀的ではないということですね。

武邑 地域のポテンシャルの上にインターナショナルがどれだけ参加してくれるかということです。ローカルに独自の力がなければ、インターナショナルが重なっていかない。それは単なるグローバリズムの礼賛で終わっていきます。この何十年かは、金融と流通とメディアが世界を市場化してローカルを吸収してきたプロセスでもあったわけです。結果は世界的な金融危機や文化多様性の喪失でした。そういう意味では、もう一度ローカルなアイデンティティーが国際都市札幌には問われていく。そういうビエンナーレに期待した

い。ビエンナーレが、札幌だけでなく、北海道そのものに大きな貢献ができるような流れになってほしい。

もう一つ、行政やまちづくりがアートを単に利用しているだけではないかというアーティストたちの声をよく聞きます。アーティストたちを軸にした展覧会であるべきだし、それが産業や経済、行政、ひいては北海道全体にどういう効果をもたらしていくかを、アーティストを交えて検討すべきです。そうしたコミュニケーションが取れていないと、経済と文化の対立を引き起こしてしまう可能性があると思います。

アートは「わがままな赤ちゃん」

石森 地域のポテンシャルとかが力が問われるということですが、アーティストとして端さんはどう受けとめられていますか。

端 アートは「わがままな赤ちゃん」です。わがままな赤ちゃんのままに育て上げながら、周りがそれをどう料理するか、そこに経済と結びつける人もいるかもしれませんが、アートはアートです。そこでいい意味での極端さ、札幌ローカルのアイデンティティーをしっかりと見据えたいと、札幌ビエンナーレが行われるべきだと思います。客寄せパンダ的に人を呼ぶという土俵に乗っても、新しいビエンナーレはもうないと思います。ローカルのアイデンティティーを本当にしっかり見ていかなければ、独自のものなんて出せないのです。武邑さんの意見と全く同じです。

武邑 アーティストの「わがまま」は、創造的な観点からは当然だと思いますが、単なる作家主義や独善では通用しません。アーティストにも地域課題や現実を直視してもらおう。具体的なプロジェクトづくりにどんどん参加してもらおうべきです。その過程を通して、アーティストたちも社会とどう具体的にかかわるのか、アーティストたちの経済活動とは何かを、もっと自覚的に認識してもらえないかと思います。

端 21世紀型のアートは、感覚のよさだけでは成り立っていないのです。この社会の中でどう生きて、それがどう反映して、自分の感性とうまい具合に点と点が合っているかというところにあるので、さっき「わがままな赤ちゃん」と言ってしまいましたが、そこにどう社会との関係性を持っていくかで、わがままを發揮してほしいということなのです。

竹津 実際問題として、行政はもっともっと文化を利用すべきだと思います。

文化を内包して、世界で販売網を拡大していく時代

武邑 トヨタのカローラが全米のコマーシャルで、初音ミクを起用しました。性能がいい、安い、壊れないというので売っていた「メイド・イン・ジャパン」は日本の技術力だけでなく、今や文化を内包しているのです。カローラは、アメリカではマイノリティーの人たちに人気の車です。多様性の文化に浸透した工業製品です。オタク層という社会のマイノリティーが大きなオピニオンを持って、アメリカで台頭してきたという背景もあって、トヨタのカローラが初音ミクで全米コマーシャルを打つ。つまり、顔が見えないと言われた日本の輸出製品も、日本の先端文化を内包して世界で販売網を拡大していくという時代です。

行政も、もっと多様な札幌の文化そのものを、行政のシティプロモーションとかブランドづくりに、どんどん入れていく時代が来ているのだと思います。

市民との関係は原点回帰で

竹津 PMFもバーンスタインは大きな存在でしたが、その前に、インフラとして芸術の森があり、ソフトで札幌があった。札幌があって、芸術の森ができて、そこにお客さんが育っていたということです。その環境がやはり一番大事です。ここから先は、若い人たちにおおいにやっていただきたいと思います。

もう一つ、最近、市民から「PMFはちょっと市民



札幌芸術の森



から離れかけている」と言われるのです。行政主導になると、どうしても市民と遊離していきます。立ち上げたところは企業回りをしたり、町内会にお願いしたり、タクシー協会などに行き、タクシーに全部ステッカーを張っていただいていた。そういうことが、今なくなってしまった。私はPMFを応援する会の会長ですから、もういっぺんそういう市民との交流の場を持って「PMFってこういうものです」と説明して、認識を新たにさせていただきたいと思います。



可児 「原点回帰」ですね。

竹津 そうです。組織委員会はとてもそこまで手が回らないと思うので、応援する会でやらせていただきたいと思っています。

文化をどうまちづくりにうまく生かしていくか

石森 新しい動きの中で、札幌市は文化をどううまくまちづくりに生かしていくかということですが、可児さんどうでしょうか。

可児 ちょうど今、札幌市では新しい総合計画、今後10年間のまちづくりの在り方を「まちづくり戦略ビジョン」として、今年から2年かけて作っていきます。



今後10年間の具体的な重点戦略をどうするか、今後20年、30年先を見通した都市像を考えたときに、その根底に流れるのは、これまでのハード中心の文化ではなく、「創造都市」の概念ではないかと思っています。それは、成長をベースにした豊かさではなく、市民一人一人が必要とされているという実感、人や社会の役に立つことを通して社会との関係性における満足感を得られることが、成熟した都市の本当の豊かさになると考えるからです。これまでのグローバリズムという考え方から離れて、水平的な考え方、社会的な包摂といった概念も含みながら、「創造都市」の思想が今後のまちづくりの根底に流れ

るものになっていくことになると思います。

市民を信じて、現代進行形の現代アートを見せるべき

端 私は、1995年に約1年間、ドイツで生活し、さまざまな国際芸術展を見てきました。アーティスト・イン・レジデンスというドイツの組織にアーティストとして行きましたが、海外のアーティストは「日本は金持ちの国」と思っていますから、日本の現状を聞きに来るわけです。私が19世紀、20世紀の作品を中心として、芸術文化における市民のコンセンサスを得るために、札幌も北海道も頑張っているという話をしましたら、予想外に周りから「何だ、それは、札幌市民、道民を馬鹿にしているのではないのか」と怒られました。「それは違うだろ。19世紀、20世紀型のアートを紹介するのは、博物館のやることだ。美術館は現代進行形のちゃんとした現代アート、新しいアートを見せるべきだ。前衛的なものをやっても、市民に分かるはずがない、動員も期待できないということで、多くの人たちのポピュリズムに合わせて、教科書に載っているような分かりやすいものだけをやっているのではないのか。それは、市民、道民を馬鹿にしていることになるのではないのか。どうして市民の創造力を信じないのだ」と言うのです。

私は今、プレ・ビエンナーレの芸術監督という立場ですが、突拍子もない極端さというものを今後は打ち出していこうと決心しています。

先端的なICTを都市は実装していかなければならない

武邑 札幌市は2008年に「文化芸術創造都市」で文化庁長官表彰を受けています。これからは、国際的な評価だと思います。オリンピック後の札幌をバージョン1.0と考えると、これからの札幌はバージョン2.0の時代です。これをどう都市として位置づけていくか。今、大きな変化が起きているのは、従来の市民運動や市民自治の延長上に、地域や時間を越えたコミュニティーの活性化が起こっていることです。ネットを介した札幌のコミュニティーの活性で言えば、例えばコンサートホールKitaraに中国語、韓国語、英語などに

対応したオンラインチケット販売の仕組みを作っただけで、アジアを中心にした文化観光のグローバル展開になると思います。

インターネットが広く浸透し、市民の情報インフラとなったことで、都市の情報化も一段落したと考えるのは間違いです。都市こそ、さらに先端的なICT（情報通信技術）を実装していかなければなりません。新しい技術革新に、芸術文化の観点からICTをどう実装していけるか。これは「創造都市」に必須な取り組みだと考えます。

ビエンナーレも地下空間も、実体として存在するだけではなく、ネットの中に存在してもいいだろうと思います。また、都市全体、北海道全体の地域特性を生かした観光の新しい動線を、ビエンナーレと同時に作っていく。例えば、ビエンナーレを起点とした北海道全域に広がるモバイル・アートマップを作成し、ビエンナーレに訪れた旅行者が北海道全域とつながれる仕組みづくりも必要だと思います。

“創造”というコンセプトが北海道の未来を明るくする

石森 今日は、いろいろな形で「創造都市さっぽろ」と「札幌ビエンナーレ」についてお話いただきました。「創造都市」という都市の未来像には非常に可能性を感じます。また、ビエンナーレには、市民に少し分かりにくい「創造都市」というコンセプトを体感してもらえらという可能性もあります。

北海道全体を考えたときに、名前は「札幌ビエンナーレ」ですが、アグリアートみたいなものへの配慮もありますし、北海道全体にとってのビエンナーレという位置づけの中で、「創造」というコンセプトが、札幌と北海道の未来をより明るくしていこうとすることを祈念し、まとめとさせていただきます。

(本座談会は平成23年8月31日に札幌市で開催しました)



札幌コンサートホールKitara

profile

可児 敏章 (かに としあき)

1959年札幌市生まれ。77年札幌第一高校卒。78年札幌市入庁。市民まちづくり局情報化推進部情報システム課長、同部IT推進課長、総務局広報部広報課長、札幌市北京事務所長（経済局産業振興部部長職）を経て、2010年から市長政策室政策企画部長。

竹津 宜男 (たけつ よしお)

1935年広島県福山市生まれ。広島大学卒。61年札幌交響楽団の創立と同時にホルン奏者として入団、同事業主任を経て、81年事務局長に就任。91～2005年国際教育音楽祭PMF組織委員会オパレーティング・ディレクター。95～99年「ハーモニーホールふくい」ディレクター。09年PMFを応援する会を設立、会長。NPO法人北海道国際音楽交流協会（HIMES）副理事長。

武邑 光裕 (たけむら みつひろ)

1954年東京都生まれ。76年日本大学芸術学部卒、78年同大学院芸術研究科修了。日本大学芸術学部専任講師、京造形芸術大学情報デザイン科助教授、同大メディア美学研究センター所長、東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻メディア環境学分野助教授を経て、2006年から札幌市立大学デザイン学部教授。専門はメディア美学、デジタル・アーカイブ情報学、創造産業論、ソーシャルメディアデザイン。財団法人デジタルコンテンツ協会評議員、札幌市「創造都市さっぽろ推進会議」座長。NPO法人 都市文化創造機構理事。

端 聡 (はた さとし)

1960年岩見沢市生まれ。美術家・アートディレクター、さっぽろアートステージ500m美術館プロデューサー。札幌を拠点に海外での活動も盛んに行い、1996年「VOCA/Vision Of Contemporary Art」（東京・上野の森美術館）で奨励賞、ブタベスト国際彫刻絵画ビエンナーレ（ハンガリー）で美術教育文化財団賞受賞。2000年札幌ドームに屋外オブジェを制作。08年北海道立近代美術館開館30周年年展「Born in HOKKAIDO」に選出される。近年は舞台の芸術監督としても活動。04年度札幌文化奨励賞を受賞。

石森 秀三 (いしもり しょうぞう)

1945年神戸市生まれ。甲南大学経済学部卒業、オークランド大学大学院に留学後、京都大学人文科学研究所研究員、国立民族学博物館教授、研究部長などを経て、2006年4月から北海道大学観光学高等研究センター長・教授。観光立国懇談会委員、国土審議会専門委員、文化審議会専門委員などを歴任。第2回大平正芳記念賞受賞。